

ポリビオスの史風 (中)

文學士 原 隨 園

五、彼の態度、その一、政治史的

既記の如く、ローマの世界統治の原因を探り、兼ねて興亡の迹を辿る事によつて教訓を得ようとする。そこに彼の歴史記述の動機がある。それ故に、彼の記述の態度が自ら限定されて來なければならぬ。

「吾々の此の歴史の書物が、或る狭い性質を持つて居る事は好く承知して居る。それは唯一つの目的を有するに留まるから、吾々は或一つの讀者階級だけからは、賛同を得べき事を當然期待する事が出来る。他の歴史家は、殆んど凡べて、少くも大部分は、歴史の總體を取扱ひ、是によつて多數の人を誘ひ讀ませようとする。

る。詮索好きの讀者は神代歴代の傳統物語によつて、或は深遠該博な學究は、植民地の話や、都市の創建或は血縁關係なきの話によつて、又政治的教養を求むる者は、諸國民、諸市、諸侯の歴史を表現する事によつて、心をひきつけられる。而して私がひたすら眼を注ぎ、私の全作品をあけて捧げて居るのは、此の最後に記したる題目に向つてである。それ故に、先きにも言へる如く、唯だ一種の讀者からは尤もだこ是認されるであらう。けれども多數の讀者にこつては、餘り同情を持たれない所の、講義を提出するものとなるであらう。(註一)

ど。此の言葉によつても知らるゝ如く、彼は主として政治的教養を求むる讀者に向つて、幾許かの資料を提供せんとする者であつた。彼が特に第六

卷に於て、ローマの政治組織に就いての考察を試みたのも、全く之が爲めである。(註二) 彼が政治家の鼻祖と考へらるゝ所以は、實に此の點に在る。

元來政治上の事件は、人類の行動の中に於て、最も注目さるゝものゝ一つである。彼よりも以前に政治事件をも取扱つた歴史家は無論ないではない。然し彼程の自覺を持ち、政治史に特殊の意味を附與したものはない。人事各般の事業の間から特に此の政治的事件を選定して實用的意義を加へて、政治史に政治史としての意味を與へた所の彼を以て、政治史の開拓者と見做すべき事に異論の餘地はない。彼の歴史記述の態度の中、特に政治的關心の深かつた事は、それ故に、第一に擧げらるべき點である。

註一、Pol. 9, 1.

註二、Ibid. 6, 1. (尚ほ、此の第六卷に就いては、後に第二節

に於て特に論じ様と思ふ。)

六、彼の態度、その二、世界史的

ローマに統一された世界は、空前の大帝國であつた。ポリビオスは、ローマ帝國統一の事情に多大の興味を感じ、歴史記述を企てたのである。即ち彼の歴史には、ローマによつて統一されたる世界が中心となつて居た。彼の對象とせる範圍は極めて大規模であり、一地方一國民の歴史ではなく世界史であつた。彼は、

「吾々は個々の民族の間に起つた事を書かうと企てるのではなく、凡べての人民の間に起つた事を書かんとする。それ故に、吾々が試みんとする任務は、吾々の凡べての先人よりも大きいと言はねばならぬ(註一)と稱して居る。又

「吾々は、先人の法に倣つて、個々の民族の歴史を書かんとするのではない。地上に知られたる一切の部分

を凡べて一つの物語りの中に包含しよう企てた。故なら、かくの如き計畫に對して、吾々の時代が珍らしくも好都合な有様にあるから」(註二)

ど。彼がその歴史に包含しようとした範圍は、世界の全般に亘つて居る。かゝる大規模な歴史が生れたといふ事は、實にローマの世界統治に刺戟されたる時代相の一面であり、又時代の要求に適應はしいものであつた。

然し乍ら、彼の目的とした範圍が極めて廣かつた事は、單に時代の姿のみに理由を歸すべきではない。彼の歴史事件考察の態度が、その出發點よりして既に廣く且つ大きかつたのである。即ち彼は凡そ事件は單にその一面的觀察からは真相が把握みえられないと考へて居た。例へば、戰の原因を探求するにしても、それは單に、「戰の事を記したもののみからは決して得られない。それは總べて一般史の間から求めらるゝ」といつて居る(註三)

それ故に、彼の世界史的態度といふものは、その題材が世界の全般を被はんとしたといふのみではない。固よりその點もある。然し單に各方面の歴史を點綴する事から世界史の目的が達せらるゝものではない。廣く各種の事象の關係を考察する事によつて、始めて全體が把握される。その全體を渾一體として把むといふ事が實に彼の世界史的態度の一面であつた。

「一部分からも全體についての觀念は得られる。然し正確な概念を眞實な洞察を引き出す事は出来ない、之を要するに、特別箇々の歴史は、全體に就いての信頼すべき知識に向つては、殆んど貢獻する事が無い。唯、各部分を總べて結合し配列する事、並びに類似ミ差別ミのみが、能く之に導き得る」(註四)

と言ふて居る。彼の態度や見解が、宏大周匝な事は、著しき特色であり、斯に世界史的と名くべき一面がある。

然し乍ら、彼は徒らに全體の事件の把握に急であつて、そのために個々の事件の考察を忽諸に附するといふのでは無論ない。彼は言ふ。

「吾々は、取扱ひに配列に最大の考慮を費し、以て吾々の計畫せる作品が、個々についても、全體についても、明確さを失はないようにすべきである」(註五)と。

實際彼は、此の覺悟を以てその歴史を執筆して居る。例へば、彼の世界史が果してニツセンの七分説の如くに記述されたりや否やは、暫らく措いて問はずとするも、かゝる推定を下し得る程明かに、ローマの發展を解説したる手腕の如き、或は隨所に梗概を掲げて、讀者の知識を總括せしめんと試みたる如き、是等は全體に就いての明確さを失はざらしめんとの用意の程が覗はれる。

或はハンニバルのイベリヤ經論に關する史料として、ハンニバルがイタリアにてその業績を書

き残さしめたる銅表をラキニウム岬に求めて利用せる如き(註六) 或はハンニバルのアルプス越えに關しては、實際參加せし者に就きて事實を聽取すると共に、ポリビオス自らアルプスを越えて實地の檢證をなせる如き(註七) 或は、從來の歴史家が實地見聞をなさざるために誤謬に陥れるに鑑み、自らリビヤ、イベリヤ、ガリヤ、大西洋岸に旅行せる如き(註八) 或は將帥としての心得を巨細に述べたる如き(註九) 是等はポリビオスが、個々の事件に向つて如何に綿密なる注意を拂つたかといふ事を物語るものである。吾々は彼の構想の偉大なりしと共に、彼の苦心の周密精緻なりし事を承認しなければならぬ。此の態度から推しても、彼は立派な世界史家だと言つて好い。

以上述ぶる所によつても、彼を世界史の錚々たる開拓者と認むる事に、吾々は異議はない。然し更に、彼の、世界史に就いての透徹せる見解を知

るに及んで、全く間然する所なき世界史家であると断定せざるを得ないのである。彼は曰ふ

「私の歴史的作品の特色は、私の取扱ふ時代の驚異すべき傾向との間に存在する類似はこうである。運命が殆んゞ凡べての世界の出来事に對して、唯だ一點に向つての進路を與へたさいふ事、及び又、他ならぬ此の一筋の目的に向つて、總べてが動かされるさいふ事、それと同様に歴史も亦、運命が、總べての出来事を完成に導くために切り開いた道程を、一目で見渡し得るやうにすべしさいふ事、である」(註一〇)

と。此の含む所の意味は、ローマによつて征服されたる世界は、既に政治的に統一されたものであつて、此の世界は、政治的には渾一體として把握され得る、といふのである。而して歴史とは、此の統一の姿を指示すべきものだといふのである。そして彼の目指した所の歴史は、即ち此の新たなる生命を有する、統一的政治團體の歴史に他ならな

いのである。その考察の範圍も固より廣汎であつて、普く世界の全體を覆ふと共に、更に是非ともそこに統一のある、一脈の生命が流れねばならぬといふのである。吾々は、彼に此の見解あるを以ての故に、彼を間然する所なき世界史家と稱し得るのである。

尤もかくの如き世界史を試みたと稱する人は、從來にもない譯ではない。彼は、

「多くの歴史家の中にも亦、自分と同様の事を言ふて居る者もある。そして一般史を書き、凡べての先輩よりも、より大なる作品を企てた、主張する者もあるそれ等について、自分は好く承知して居る。然し自分は、一般史を企てた最初にして唯一人者である所の、エフォールスを除いては、多くを述べる事を差し控えない」(註一一)

と言つて居る。實際ポリビオスに先立つそれ等の人々は、或はローマとカルタゴとの關係を各方面から物語り、以て一つ的一般史を書いたと稱して

居たそうである。或は年表式に無味乾燥な事件を記述するはまたよいとして、甚だしきに至つては、それだけの事實をさへも列擧しないで居て、自分ではギリシヤ人その他の諸國の歴史事件を盡く記述したと稱する者もあつたそうである(註一)然し乍ら、ポリビオスの言へる如く、統一ある意味での世界史を記述するといふ事は、固より大事業であつて、實際至難の業である。それ故に彼は、エフォールスを除いては、成功したものを見なかつたと稱するのであつた。かゝる歴史が、まだ多く書かれて居なかつた事、及試みても成功して居なかつた事は、實にポリビオスが奮起して世界史の記述を試みた一つの動機でもあつた。(註一三)而して彼は、此の氣高き目的を、殆んど貫徹したのである。

註一、Pol. 5, 31.

註二、ibid. 2, 37.

註三、ibid. 3, 32.

註四、ibid. 1, 4.

註五、ibid. 5, 31. 註六、ibid. 3, 33
註七、ibid. 3, 49. 註八、ibid. 3, 59.
註九、Pol. 9, 12-15. 註一〇、Pol. 1, 4.
註一一、ibid. 5, 33. 註一二、ibid. 5, 33.
註一三、ibid. 1, 4.

七、彼の態度、その三、劇と歴史

吾々はツキデデスに於て極めて批評的な科學的な態度を發見する。それにも關らず、彼はなほ多數の演説を直接説話の形式で表現して居る。吾々は此の點に昔ながらの劇的表現法の影響を認めねばならない。とはいへ兎に角ツキデデスに於て批評的になり來つた歴史學も、ツキデデス以後に於ては、再び昔の修辭的又劇的な表現を事とするようになり、事實の真相を語るに甚だ不正確だといふ結果を生じた。此の文學的傾向を匡して、歴史學を再びその正道に引き戻した者をポリビオスとするのである。

彼は「最も重要な點を、印象を深からしむるために、讀者に回想させるといふ事は、毫も妨げないといふて居るから（註一）、ポリビオスが歴史表現の技巧に就いて、決して無關心でなかつた事は明かである。然し乍ら、單に興味を中心として、感動を讀者に與へる事、唯そのみが歴史記述の唯一の目的ではない。歴史に於ては、飽くまでも事件の眞實が要求される。歴史と劇、歴史と文學とは此の點に區別されなければならない。吾々は彼自身として語らしめよう。

「歴史家の任務は、異常な事件を物語つて、その讀者を感動させようとするのではなく、又適應はしい話を作り出すものでもない。或は又悲劇作家のするように事件の細目までも語りつくさんとするものでもない。唯實際何が爲され、語られたかといふ事を報告するに在る従つてそれは、平凡な種類のものであるべきだ。歴史の目的は悲劇のそれとは同一ではない。寧ろ正反對で、

ある。一方は最もありそうな話を以て目前の聴衆を感動させるを目的とする。他方は實際の行動を以て、好學の士を永遠に教へ指導するを以て任務とする悲劇作家に於ては、それが謳はれる時にも亦、看客を幻惑するを目的とする故に、眞實らしいといふ事が必要である。歴史學に於ては、之に反し、學ばんとする者が、利益を獲得する事を目的とするから、事實だといふ事が重大である」（註二）

と言ふて居る。或は又

「動物から眼を除去すれば、その動物は無用のものとなる如く、歴史から眞實といふ事が除かれるれば、殘餘は、一片の無駄噺に過ぎない」（註三）
とも言ふて居る。

歴史家はかくの如く、事實に重きをおく。勢ひ眞偽の批判と討究とが必要である。それ故に物語つて眞實ならざる歴史家は、彼の甚しく排斥する所である。彼がチマイオスを批難したのはそのためである。即ち

「チマイオスに於ては、研究といふ事が全く忽せにされて居る。然し此の點が實に史學研究の本質的條件であるのだ」(註四)

といふて居る。

ポリビオスはかく研究を主眼とし、事件の真相を語らんとするが故に、理由なき賞讃、従つて又漫罵も、彼のとらざる所であつた。「フィリツツの事蹟を書いたものは概ね頌徳の文となる。」「此の點に於て史家テオポンボスは最も批難さるべきだ」と言つて居る。(註五)又フィリオスの筆はカルタゴを辯護し、ファビウスの説は、ローマを擁護する事多しといふの故に、之等を斥けて居る。(註六)

「自分の見解によれば、眞實を犠牲として諸候を褒貶すべきではない」(註七)

とは、彼が正確を期するの態度であつた。

彼は歴史家自らについても曲筆を戒めたが、そ

れと共に、讀者も亦此の點に留意して、歴史家の筆端に惑はされてはならぬと戒めて居る。(註八)

註一、Pol. 9, 1.

註二、ibid. 2, 56.

註三、ibid. 1, 14.

註四、ibid. 12, 4c.

註五、ibid. 8, 10 & 11.

註六、Pol. 1, 14 & 15.

註七、ibid. 8, 10.

註八、ibid. 16, 14.

八、彼の態度、その四、歴史家の資格

吾々は今迄ポリビオスが歴史を如何に批判的に取扱つたかといふ事をみたが、それは又歴史家の資格を説くあたりにもあらはれて居る。彼は言ふ「歴史記述は極めて醫術に似通つた點がある。双方共にその本質的な種目に従へば三種に別れる。……例へば醫術には、理論的、衛生的、外科及び投藥的といふ三方面がある」(註一)

「同様に又實用的歴史も三部門に分れる。一つは即ち根本的な史料探求を、それより得たる材料の加工まである。第二は即ち都市、地方、河港、要するに水陸に

おける特色、距離なきの踏査である。第三は政治的事
件に自ら關係する事である」(註二)

ど。即ち歴史家たるべき必要な資格として、第一
には典籍史料の考究、第二には實地踏査、第三に
は經驗といふ此の三つをあげて居る。此等の點は
頗るツキデダスに似て居る。(註三)

而して彼自身は固より是等の資格を具備して居
る。

第一に彼が史料の研究に重きをおいた事は前節
にも見らるゝ所である。彼は同時代の人又は樞要
な地位にある人と雖も、その人によつてその書を
信じなかつた。例へば、ファビウスはローマの
元老院議官であつたにも関わらず、そのポエニ戦役
の原因に關する所論は偏して居ると言つて斥けて
居る。(註四) 況して所謂歴史家の編纂書に至つて
は、絶對的信賴をおき難しとしたのである。

「歴史家の見解は固より輕んずべきではない。然しそ

れを決定的だミ考へてはならない。寧ろ我々は事實そ
のものから判断せねばならぬ」(註五)

といふて居る。彼は典籍に大に通曉して居たが、
それにも關らず、實際に當つては、是等の典籍よ
りも先づ古文書を探索し、根本史料によつて研究
した事は事實である。例へばラーデ島の海戦に於
て、當局者の報告した所の手書を根據として、ア
ンチステネスやツェノンの議論を辨駁して居るの
でも知られる所である。(註六)

第二の實地踏査といふ事も、彼が極めて力を用
ひた點である。彼自身は、ギリシヤの地理は固よ
り、イタリア、シチリア、アフリカの地理にまで
通じ、又スキピオと共にイスパニヤに渡り、太西
洋に出で、ガリヤからアルプスを越えてイタリヤ
に歸つて居る。彼は自ら歴史家たるべき第二の資
格をもつて居る。それ故に他の歴史書についても
ツェノンは、ラコニヤの地理に關しては無智であ

つて、而もその誤りは重大であると考へるから、自分は親しくツェノンに申送る事を躊躇しないといひ(註七)又チマイオスは、「報告すべき何物をも持たず、實際とは、全然反対した事でも尤もらしく物語つて」居り、その歴史は、實は「全く架空の作り話である」とさへ酷評を加へて居る(註八)第三に彼は政治的軍事的體驗を有するから、此の點でも彼が歴史家たる資格は十分である。

「主として自分が大部分目撃者であるのみならず一部分は自分が参加して居る事、又時には自分が指導した事もある。此のために自分は心を動かされて居る」

(註九)

と彼自ら歴史を作つた動機について語つて居る程である。

吾々は、ツキヂデスが體驗を重んじ、史料の吟味を慎重にし、斷定を苟もしなかつた態度に比較するも、ポリビオスは決して遜色なきものと言ひ

得る。

註一、Pol. 12, 25d.

註二、ibid. 12, 25c.

註三、Timaeides, 5, 26; 2, 48; etc. 註四、Pol. 3, 9.

註五、ibid. 3, 9.

註六、Pol. 16, 15.

註七、ibid. 16, 20.

註八、ibid. 12, 3—4.

註九、ibid. 3, 4.

九、彼の態度、その五、超越的解釋

への批難

彼は歴史の目的を實用的なものに見做して居る。夫故に勢ひ歴史事實の實踐的批評に亘るのは已むを得なかつた。然し、作者自身の愛憎好惡の念から發する批評は純正なものとは言へない。彼は飽くまでも、歴史家として事實の正確を要求する。即ち、歴史事實の批評に先つて事實を如實に認識する事を求めた。従つて歴史事實の真相を窮めない所の、超越的評價を斥ける。彼は曰ふ。

「人が若し、正しき處に於て、正しき時に於て、考察

するならば、凡べての對象は褒貶何れにしても正當に判断される。之に反して、時と處とを無視し、無關係に對象を視るならば、歴史家の事實の美はしき表現も賞讃すべからざるのみならず、又忍びえざる所である(註一)

と。彼の下す批評は、事實の公平なる判断を旨とし、我執偏見を交へた獨斷的な評價を排斥せる事は明かである。

更に此の句は、別の意味に於て、含蓄の深い言葉であると思はれる。即ちそれは歴史事實の個性を明かに認めて居ると解する事が出来るからである。歴史事件に、時と處といふ二つの制約がある事にも注意して居るからである。眞實に歴史事實を認識するためには、一定の時と處とに於て考察すべき事を教へて居るからである。かゝる二つの制約を無視しては、歴史事件を正當に理解しえないといふ事を力説して居るのは、注目に價す

る。

さて歴史事實を忠實に認識した上で、之を正確に公平に評價し批評するといふ事は、言ふは易くして行ひ難い。その理由として彼は、

「雑多なる境遇や生活關係があるから、その影響のため、人々はその確信を、文字と言葉を以て告白する事を妨げられる」(註二)

といふ居る。彼は人々の心意的活動が極めて微妙であつて、外的制約に動かさるゝ事を承認して居る。此の點も、ツキヂデスが群集心理や本能や個人的打算や黨派的反感や、種々な點から心持に動搖のある事をのべたのに比しても(註三)決して劣らない程度の精透さであると言つて好い。而して此の點は、後に掲ぐる如き、環境に對する注意と併せて注目すべきである。

以上畧説したような動機と態度とを以て、彼は

その世界史の著作に従つたのである。然らば彼は歴史事件そのものを、如何に考へて居たかといふ事が次の問題である。殊に歴史事件の發生する原因を如何に解釋したかといふ事は、彼の研究的態度と、並びに彼の叙説の態度とに對する、根本的條件として考究されなければならない點である。

註一、Pol. 6, 11.

註二、Ibid. 8, 10.

註三、Thucydides. 3, 82; 1, 76; 5, 43; 3, 84, etc.

國境の研究 (下)

文學士 下田禮佐

三、言語

交通機關の進歩、戰術の變遷に伴ひ、大山脈、大河も障壁としての價値を大に減じた。即ち地文的國境は已に過去の境界である。言語は之に代るべきものとして今正に流行の中心たる觀がある。勿論言語はその分化については前述の如く氣候が大なる影響を及ぼすものであるし、發達、興亡に

ついては政治上その他の原因によることが多いものであるから、言語を以て境界線決定の獨立的、最後の要素とは見做しがたいけれども、氣候、政治その他の理由による言語の分化、發達、興亡は數百年間に起る變化であるから、過去に於ける政治上の衝突、壓迫等に就ては、言語の相違が直接且つ第一の原因をなしたことが多いのである。殊に世界大戰以來歐洲の一般の思想では、單に或る種